

日本を動物福祉の 先進国へ



日本では1970年代初期から絶滅を危惧される野生動物を保護する活動が行われるようになり、1990年以降は持続可能な社会を目指す活動の一環として、より危機感を持って取り組まれるようになっていく。しかし、経済発展など人間中心の社会が徐々に優先される傾向は変わらず、ほかの先進諸国と比較しても日本には動物保護の分野に課題が多く残されているのが現状だ。JACグループの成長を牽引する傍ら、英国や日本で動物保護および動物福祉のボランティア活動に取り組んできた田崎ひろみは、2022年、日本の動物保護や自然環境保護を世界に恥じないものになりたいという強い信念のもと、私財を投じて JAC 環境動物保護財団を設立した。

設立の 背景

動物たちのあたりまえの 尊厳を守りたい

田崎ひろみは、幼い頃から動物園によく通っており、動物たちが本来の生育環境とは異なる空間に閉じ込められていることに疑問を抱いていた。「人と動物の付き合い方はこれで良いのか」という少女時代に感じた想いは、英国に渡った後に日本との違いを目の当たりにして、より強くなっていく。例えば、英国ではペットショップがほとんどなく、ペットを飼いたい人は個人宅で行っているブリーダーの元へ足を運び、対面式で購入もしくは譲渡されるのが一般的だった。動物を商品のように扱うペットショップではまともな生育環境を確保できないため、動物を大切に考えるイギリス人たちは個人のブリーダー（日本における商業的なブリーダーとは全く異なる個人が自宅で行うブリーダーを指す）を通じてのやり取りを好んだ。彼らから見れば、日本で犬を屋外（庭先）につないで飼うのも虐待にあたる行為である。また英国では、動物の飼育や利用、販売に関する法令が70以上も存在し、動物愛護の基盤がしっかりと形成されている。社会の仕組みが動物を守るようにできていることに、ひろみは感動する。そして英国の動

物保護や動物福祉の考え方は、野生動物やペットはもちろん、動物園のあり方や家畜の飼育環境にまで及んでいることを知って、日本における動物保護を先進国並みにしたいと強く願うようになっていく。

そんなひろみの想いを加速させたのは、阪神・淡路大震災だった。ひろみは東京滞在中は動物愛護団体のボランティアとして、事務局の業務を手伝っていた。当時の日本には、ボランティア活動が浸透しておらず、ましてや動物たちを保護するためのノウハウも組織も少なかった。ひろみは、何をすべきかもわからないまま、感性と使命感で、獣医、動物園、自治体、NPO、ボランティア団体など、さまざまな人をつないで被災動物の救援活動に貢献した。

こうした具体的な行動を通じて、少女時代の疑問の答えを見出しつつあったひろみは、2022年3月、一般財団法人「JAC 環境動物保護財団」を設立（2023年2月、公益財団法人に認定）。「経済の発展による富は地球に還る」ことを信念に、2024年現在、年間1億6,000万円程度を、日本の希少野生動物の保全や、研究機関、動物園、犬猫等の動物福祉向上、家畜や引退馬の保護および福祉向上を目的に助成を始めた。ここに、動物保護・福祉における助成額において国内最大級の財団が誕生した。



©Koji Tanaka
世界遺産の西表島で絶滅危惧種のイリオモテヤマネコ



NPO 法人『どうぶつたちの病院 沖縄』
ヤンバルクイナの保全活動の現場を視察



ワンウェルフェア寄附講座の開講シンポジウムにて

財団の 支援活動

助成を通じて、動物保護・ 福祉の活性化を実現

JAC 環境動物保護財団では、動物保護と動物福祉、それに伴う自然環境保護を行う団体や、動物園などの改革のための補助や家畜の動物福祉などに対する助成を通じて、人と動物の持続可能な共存と、その実現を目指して活動している。2023年2月に公益財団法人として認定された後の初めての助成先選定には、北海道から沖縄まで全国から約200件の応募があり、そのうち59件を助成対象として決定。4月には計8,200万円の助成金が交付された。翌年は108の団体に対して約1億3,000万円の助成金を交付。また財団の取り組みは活動団体への助成以外にも、寄附講座の開設や、各団体の視察・啓発活動など多岐にわたる。2024年度は日本獣医生命科学大学の寄附講座に年間1,500万円を助成し、5年間で7,500万円のサポートを決定したほか、多くの団体や研究機関などのネットワークを生かして、優良な活動事例などの共有にも尽力している。

1. 活動団体への助成
「希少な野生動物の保全」や「動物福祉の向上」などを目的とした活動団体への支援を行う。専門家による選考委員会にて選考したのち、理事会の決議を経て助成先を決定している。

【助成対象となる活動分野】
●希少野生動物の保全 ●伴侶動物・家庭動物の動物福祉向上 ●動物園・水族館の動物福祉向上 ●家畜・産業動物の動物福祉向上 ●自然環境の保護 ●引退馬の保護に対する助成

2. 寄附講座への助成
動物福祉、人のWell-being、生物多様性、環境保全、持続可能な社会はすべて一体である」というワンウェルフェアの概念のもと、動物福祉向上のための活動と教育、人材育成を行う。

【寄附講座の例】
●日本獣医生命科学大学『JAC 環境動物保護財団ワンウェルフェア寄附講座』

3. 視察・啓発活動
助成先の活動現場を訪問し、その活動状況や成果をWebサイトをはじめとしたさまざまな媒体で発信。自然環境・動物保護に対する理解と促進につなげている。

【助成先の例】
●認定NPO法人トラ・ゾウ保護基金 西表島支部 ヤマネコパトロール イリオモテヤマネコの保全活動
●NPO法人『どうぶつたちの病院 沖縄』ヤンバルクイナの保全活動
●猛禽類医学研究所 希少猛禽類のバードストライク防止を目的とした活動

今後の展望

JAC グループ全体でさらなる拡大を目指す

日本では動物保護および動物福祉の活動はまだ発展途上。そのような状況下において、JAC 環境動物保護財団では、日本における自然保護、動物保護と福祉、環境保護の常識を根本から変えていきたいという想いで取り組んでいる。今後は、助成先での地域環境保全活動に JAC グループ社員がボランティア活動として参加するなど、グループ全体でサステナビリティへの取り組みの意識を浸透させ、動物と自然と人が共存できる社会、環境づくりを支えていくことを目指している。



財団主催のセミナーにて、日本動物園水族館協会顧問の成島悦雄先生(左)とRSPCA 国際部長の Paul Littlefair 氏(左から3番目)